

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇バブルサッカーに塩ビ製バンパーが使用

## ■随想

◇レソト王国旅行記（7）ーローランド・ハイランドー

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

## ■編集後記

## ■トピックス

## ◇バブルサッカーに塩ビ製バンパーが使用

最近、テレビでも時々紹介されます「バブルサッカー」のバブル（バンパー(Bumper)と呼びます）が、塩ビ製のものがあると聞き、早速、東京タワースタジオにある日本バブルサッカー連盟に行き、鈴木俊和チーフインストラクターに取材しました。

バブルサッカーは、大きなバンパーと呼ばれる中心が空洞の風船の中に入った状態で行うサッカーのことです（写真1）。風船を肩で担ぐと同時に両手で内側にある取っ手を持ってバンパーを固定し、この状態でサッカーを行います（写真2）。10年程前にノルウェーのサッカー選手が始め、テレビやYouTubeで紹介されたことから今や世界中に普及し、来年にはワールドカップも予定されているとのこと。日本には2014年ごろに入って来ており、競技人口は約1.6万人と2年ほどで急速に広がっています。

このバンパーは塩ビ製のものと、ポリウレタン製のものがあるそうです。塩ビ製のものは、小人用（体重：50kg以下）直径1.20m（3万円程度）、大人用（体重：80kg以下）直径1.50m（3万5千円程度）、特大（体重：80kg以上）直径1.7m（4万円程度）があります。こうした空気入り製品では、塩ビが接着性に優れており、品質・性能・強度などの安全性が高く、大型の空気入りポートや浮袋などとして良く利用されています。

バンパーは、表、内側とも8枚のシートを張り合わせて作られており、表側と内側を太い紐で繋ぎ膨らんだ時の形状を保っています。塩ビ製のものの方が安価で、印刷性に優れるためチーム名や企業名を入れたり着色したりしてファッショナブルにできることから人気があるそうです。しかし、子供や女性では軽いウレタン製が好まれるようです。各サイズで大体1kg程度塩ビの方が重いようですが、最近ではTECH LITEから軽量化した塩ビ製バンパーが販売されているようです。



写真1. 塩ビ製バンパーに入った様子



写真2. ゲームの様子



写真 3. 外側の汚れ

試合では、大きなバブル同士のタックルやぶつかり合いでボールを奪ったり、ゴールを守ったりするため、激しい接触やコロコロと転がったりで、バンパーが破れたり、継ぎ目から空気が漏れたり、ビニールの表面に傷がつき白く曇ったりするそうです（写真3）。バンパーの内側から透明シートを通して外を見るため、汚れがひどいと見られなくなります。現在は、バンパーはほとんどが中国製のため壊れた時など修理が依頼できず、自分たちで試行錯誤の上、良好なテープ

を見つけて修理し再利用されているそうです。

連盟の方は、より壊れにくく、また汚れにくい素材の開発が望まれており、ぜひ日本で製造販売してほしいとのことでした。

バンパーを実際に装着しボールを蹴ってみました。体は大きな空気ボールで守られている感じで、当たっても怖くなく、楽しめるスポーツという印象で、是非トライしてみたいと思いました。

尚、ルールなど競技方法や大会については、[日本バブルサッカー連盟](#)にお聞きください。バンパーの貸し出しや、インストラクターや審判の出張にも対応できるとのことです。

## ■ 随想

### ◇レソト王国旅行記（7）ーローランド・ハイランドー

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

レソト王国は標高が一番低いところで 1,400 メートル、一番高いところは 3,482 メートルに位置することはすでにお伝えしました。

標高が一番低い場所は首都のマセルです。首都ですから、官公庁や企業の本社など、重要施設が集まっており、比較的ステータスが高いと思われるがちですが、レソト人の感覚はちょっと違うようです。

レソト王国では、標高が低いところをローランド（Low Land）、高いところをハイランド（High Land）と呼んでいます。具体的に、標高何メートル以上がハイランドになるという決まりはないようですが、レソト人に聞くと、あそこはハイランド、こっちはローランドと地域により区別しています。

レソト人にとってステータスが高いのはハイランド。日本の感覚では山岳地帯に相当するので、田舎という場所です。もともとローランド出身の人は別として、会話の端々に、「私はハイランド出身」、或は、「ハイランドにある〇〇という所に住んでいる」と誇らしげに語ります。

逆に、仕事の都合でローランドである首都のマセルに住んでいる人は、恥ずかしそうに「仕事の都合でマセルに住んでいる」というような言い方をし、また、「ごみごみして空気が悪い」など、低い評価をします。もともと山岳地帯で農耕をして暮らしてきた人たちですから、お金のため、ローランドに行くのは“都落ち”のような感覚なのかもしれません。

そうはいつでも、この国は首都、一極集中が極端で、首都のマセルを離れるとスーパーなどがただけでなく、小さな個人商店やガソリンスタンドですら、ほとんどなくなります。そのガソリンスタンドも、やっと辿り着いたと思っても、売り切れの場合が多く、この次のガソリンスタンドは 100 キロメートル近く先、しかも、在庫があるかどうかは行ってみないと分からないという状況です。このため、200 キロ程度走行すると、ガソリンスタンドはないかと、探し回り、給油しないと、とんでもないことになります。

余談ですが、今回借りたレンタカー、フューエルゲージが壊れていて、どんなに走行しても、いつも満タン表示のままです (^\_^;

旅行ガイドブックやサイトにも、必要なものは全て、首都のマセルで買い揃えてから国内旅行に出発しましょうと書かれています。

ローランドとハイランド、当然、人の暮らし、時間の流れも違います。ハイランドは、朝、日が昇ったら仕事に行き（ほとんどが農業か牧畜業）、夕方になったら帰宅をする。締め切りや会議があるわけでもなく、毎日、決まったような時間が流れています。

そうはいつでも、ハイランドに住むレソト人にとり、首都のマセルに行くのは一大イベント。乗用車を持っている家もほとんどないので、ちょっとしたバス旅行。前日になると「明日はマセルに行くんだよ」と大人の人でも嬉しそうに話してくれます。



山の中に点在している、ハイランドの集落です

このような人たちがマセルに行くともう大変。普段、買えないものを大量お買い上げ。帰りのバスは人も満載、天井にまで荷物満載。これで 1,000 メートル以上の標高差を登っていくので、その速度の遅いこと。エンジンをブンブン唸らせ、坂道を登っていくバスの脇を、歩いている人やロバの背中に荷物を乗せた人が、平然と追い越していきます。

都会の生活と、山岳地帯の集落での生活。

日本人の多くは、都会の生活に憧れるのですが、今回私が出会ったレソト人の大半は、山岳地帯の集落があるハイランドの生活に憧れていました。

(続く)

次回は、(8) -レソトご飯- です。

⇒ [バックナンバー](#)

## ■ 編集後記

7月3日に台風が発生したと気象庁から報告がありました。しかも、今年の第1号とのこと。平均的には4月までに第1号が発生しますが、7月3日というのは観測史上2番目の遅さだそうです。ちなみに第1位は1998年7月9日です。1号発生が遅い年は台風発生数が平年の8割ほどとのことですが、日本への上陸数も少なくなるとは言えないそうです。今年は、なるべく発生数が少なく、九州への上陸も少なくなるよう祈っています。

(ももった)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 名原 克典

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)